

本論文は「昭和文学の上海体験」と題して、中国ナショナリズムの風潮が高まる中で租界文化の繁栄・爛熟期を迎えた時代から、日中戦争の勃発とその長期化によってこれまでにない社会変動に見舞われた時代にかけての上海との関わり方が、それより前の時代と比べて一層の幅と厚みを増していった昭和文学の諸相についての考察を試みたものである。

序章では本稿全体がどういったコンテクストに支えられているかについて概説する。まずは〈魔都〉や〈摩登〉（モダン）という懐古的情緒が先行する粗い解釈格子からすり抜けてしまう作家たちの上海体験の実態を作品に深く測鉛を下して探ることが目的の一つであることを提示した。そしてそこから見出される彼ら／彼女らにとつての上海像が、それぞれ密度を増して拡張していくこと、昭和詩史における新たな表現上の位相の獲得とも関連していくこと、国というものを基盤に置いて作り上げたものに揺さぶりをかけていくものとなることについての見通しを記した。また、昭和文学の上海体験の総体を見通していくためには個々の文学者の営為に添って考察を進めていく道筋とは別に、彼ら相互の関わりが形作っていく文芸文化ネットワークのありようや、租界都市上海が供給してくる多言語空間や異民族文化との間に交わされる出会いや衝突のドラマを積極的に考察していくことの必要性についても言及した。なぜなら、こうした考察視点を持つことによって、いわゆる孤島時代の終焉から淪陥期にかけての上海には積極的な評価や検証に値するものは少ないとしてきた、日本近代文学史および上海文化史の通説に対峙し得る文学や文化の可能性が浮上してくるからである。その点についての見通しを立てるとともに、さらにそこから返す刀で、同時期にあつての現地日本語新聞雑誌メディアに掲載された文学作品についても複眼的な読みの必要性があることを論じた。そしてこれらの目論見とそこから見えてきたものに対応させるべ

く、これ以降の本論を五部構成にするとともに、そこに組み込む第一章から第十九章までの論考は全体として見ればほぼゆるやかに時代の流れに沿うように配置した。以下、本論の概要を示していく。

第Ⅰ部「拡張する上海イメージ」では、主として、一九二〇年代後半の文学者が上海の現実態とどのように切り結び、それを各自の作品の中にどのように結実化させていったかについて論じた。すなわち第一章ではその少し前に〈魔都〉上海のイメージを日本の言説空間に定着させた村松梢風の周辺にいた井東憲を取り上げ、『上海夜話』と『新上海夜話』収録短編群が、そこに登場する放浪者の漫歩を繰り返すことを属性とする「私」の存在によって、悪の華が咲いた都会の底でそうした形容以上に不逞で不定形な生のエネルギーを蟠らせた人間たちを描き出している点に注目した。また、井東のもう一つの作品『赤い魔窟と血の旗』も考察の対象とした。四・一二クーデター前後の上海を舞台とする、前者に比べるとプロレタリア的な政治意識が前面に押し出された長編小説だが、この作品の典拠として「申報」の存在があることに關してと、そうした中国の新聞記事も含めた様々な活字情報が溢れていく中で、小説のテクストは作者の思惑を裏切って彼の志向する革命のプログラム中にそう易々と回収されていかないメディアの戦争状態に突入した都市のイメージの方を伝えてくる点とについて論じた。

第二章では金子光晴の上海体験に目を向け、都合三回にわたるそれが彼にもたらしたものが等質のものではなかった点をその作品を通じて考察した。まず取り上げたのが最初の上海行の産物である「上海より」と題したエッセイや詩集『鱻沈む』に収録された作品群だが、これらの作品世界を多分に支配するものは、詩人として出立して以来の彼の持ち味であった高踏的、審美的な感性、日本での偏狭な生活情緒からの一時的遁走によって生じた解放感と浪漫的な心情である。だが、その二年後の上海逗留はこの都市の凄愴な現実に彼の心身をずっぷりと浸らせた。その点を詩「上海を俺の棺材に：」によって確かめつつ、さらにこうした体験が昇華されて成った後年の自伝的作品『どくろ杯』にも目を向けた。そして、皮膚の生理を通して「どぶ泥」の世界に沈潜していくことが新たな人間認識に通底していくことを告げているところにこの作品の真骨頂があると結論付けた。

第三章では横光利一の小説「上海」について、初出テキスト中の三分の二近い量が残っている直筆原稿を補助線として考察してみた。原稿執筆過程にあつての厩大な加除修整からは、いわゆる新感覚派的な表現の前景化をはじめとする幾つかの傾向を指摘できるが、今回もっとも注目したのが芳秋蘭に対する斧鉞の加えられ方である。すなわち、物語の展開上彼女が初めて登場する場面にしてからがそうなのだが、原稿上での言葉の出し入れは、五・三〇事件前後の上海で「国民革命」の気運がとみに増してきた事態に対応させるべく、この女性に共産党の女闘士としての属性を与える傾向を示していく。だが、それと同時に、作家の推敲の跡は「典型的な支那婦人」としての美しさを持つ人物に彼女を導いていったことも伝えてくるのだ。とりわけ、小説のラスト近くで再会した参木とお杉の間に「水色の皮襖」を纏った芳秋蘭の幻影が割って入ってくるイメージが原稿用紙の余白に書き加えられていった箇所は見落とせない。「上海」の直筆原稿は、ことほど左様にフィクションにかつ生き生きとしたかたちで膨らみ始める人間像を提示してくるのである。

第I部の掉尾にくる第四章では、上海と関わる文学者を個別的に取り上げてきたここまでの論の進め方からやや方向を変えて、同時代の上海ではどういった文芸文化ネットワークが日本人もそれに関与して形成されていたのかという問題に迫ってみた。具体的には内山書店から発行されていた文芸漫談会機関誌「萬華鏡」を見ていったのだが、同人のラインナップや掲載作品を単体として取り上げてみても（たとえば「ある踊り子の日誌」）、そこには上海特有の文化的雑居のイメージが溢れていることが確かめられる。とともに、上海の内外にある雑誌メディアとの関わりにおいて「萬華鏡」が「創造月刊」や「戦旗」との間にある種の通路を開いていたことも見てとれるし、同誌の装幀を手掛けた宇留河泰呂がこの時期上海で繰り広げた活動を追っていくと、彼の活動を介して「萬華鏡」が上海の出版界の中に生じ始めた造本感覚をめぐる新たな潮流とも無縁ではなかったという事実にも突き当たる。文芸サロンの雰囲気や第一の特徴であると思なされてきた「萬華鏡」から、そのみでは括れない問題系を引き出すことができた。

第Ⅱ部「戦時下における詩の行方」では、戦前から戦後にかけての詩の領域で注目すべき活動を展開した三人の詩人たちの日中戦争下における創作活動を俎上に上せた。第五章では池田克己の詩集『上海雑草原』が現代詩の展開上有する意義について小野十三郎の詩と評論とを参照軸として考察、かつて戦場となった広袤とした原の風景を前にして池田の作った詩は、詠嘆で彩られた短歌的抒情性がそこからは後退し、それに代わって現代詩を更新していく可能性を内蔵した自然の非情性が領略されはじめている点において高く評価されるべきだが、その一方、東亜新秩序の理念やイズムに対する詩人の信頼が増してくるに従って、そうした詩的精神によって提示された、詠嘆の対象となる景勝イメージとは異なった塊としての風景イメージには亀裂が入り、詩としての独立性が損なわれていくという問題も等閑視することはできないと結論づけた。

同様に第六章でも、草野心平がアジア太平洋戦争の始まって間もない頃に現地発行の邦字新聞「大陸新報」に連載した小説「方々にゐる」に差し込む光と影とを問題にした。南京で暮らす北山十蔵の前に現れた梨花の持つツツ抜けの明るさ、また当の十蔵にしてからがヘーゲルの探検記に出てくる餓えた彼によって食われた蛙の偉大さに打たれたり、黄河源流への旅を夢見たりする心性を持つ人物として造形されている点に、草野のポエジイは如何なく發揮されているとは言えるが、それが大東亜共栄の夢と小説のタイトルが含意しているその夢の担い手とが方々に広がっていくことへの期待とに接ぎ木されていくことによって、この小説は変におさまりの悪い印象を与えるものになってしまう。そしてそのことは、一読して芸術的感動がそこからも生じてきそうな、十蔵が南京の夕暮の光景を荘厳なものとして見入っていく場面が、同じ南京にある紫金山の人間の哀歎を他所にした峻烈な美を前にした主人公が、それによって徹底して人生を見る眼を獲得していく場面を組み込んだ堀田善衛の小説「時間」と比較した時に、そうした立ち位置を危うくさせていくことから証明されるのである。

第七章では草野や池田よりも年若くして「中支」での陣地構築に携わった木原孝一の『戦争の中の建設』を論じた。同書は当時流行していた建設戦を扱った作品群の一端に連なる性格もたしかに有している。が、それ以上

に注目すべきは、詩人たることを自負する若い「僕」が、この荒涼とした戦場で、自らのポエジイへのシンセリテを失わずに新しいエスプリを打ち立てていくためにどうすればいいのかを問い続けていることである。同じ頃北京にいた中藪英助青年を感動させたこの思いは、作品の叙述全体にある種の透明感と内的緊張感とを与えていたが、それはこの詩人が都会的洗練さを売りにする、モダニズムの飛沫を浴びただけの存在から一步その先へ進み出ることを意味していた。そして、『戦争の中の建設』とほぼ同時進行の形で書き継がれていくさまさまな詩的寓意を張り巡らした散文詩的な作品群が、詩人が自らの苦痛を核として生の試行に踏み出すことを告げていくのである。

ところで上海を題材とした文学作品を書き上げた女性作家の存在も逸するわけにはいかない。第Ⅲ部「国柄から流れ出る心」の冒頭第八章では池田みち子に照明をあてた。一九四〇年代前半の時期において芥川賞候補に上った「上海」から「邦人商社」に至るまで矢継ぎ早に執筆されていた彼女の上海ものは、混血児や国籍不明の破落戸然とした男とこの街で暮らす女や、事変を契機として新聞記者からブローカーに商売替えした男たちが、〈日本〉に対して違和を表明し、その国柄から距離をとっていく姿を多く描いている。彼らの存在は強大な力を持つ国からすれば砂粒のごときものにすぎず、その異議申し立ても国の屋台骨を揺るがしたりはしない。だが、国力を背景として自身の勢力を誇示する人々の群れの外へ漂い出した女主人公が、早急な結論をほしがらないことを自身の心の拠り所として生き始めることは、それだけでもって彼女の自己証明のかたちとなっている点を論じた。

第九章、十章では林京子の「ミッシェルの口紅」と「予定時間」とをそれぞれ論じる。両作とも戦後半世紀前後の時間が経過してから書かれたものであるが、作品が扱う時代とそれが捉えている主題の性格をふまえてこの位置に置いた。「ミッシェルの口紅」は日中戦争下の上海の路地で暮らす日本人の少女の視線を通してその時その場で生起する出来事を語った作品だが、すぐれた映像喚起力と方法としての記憶の錯誤によって構築されたその世

界は、「私」の夢を育む場であるとともに、「私」にとっては何かそれが常態を踏み外したように感覚されるものを現前させてくる。「私」をそのような思いに導く遊び友達の中国人少女、「ヤアチイの家」の日本人娼婦、上海を前にして船から入水自殺した男たちは、なぜ自分たちがそういう行為に出たかを具体的には語ろうとはしないし、したがって「私」も彼らの思いを分有するには至らない。にもかかわらず、少女の「私」が帝国の庇護の周縁で生きた人々への関心を抱いているのは確かなことだという読みを示した。

「予定時間」は戦時下の上海で新聞社の特派員として過ごした「わたし」がそれから半世紀の時を隔てたいま、その当時のことを回想するかたちをとって物語が展開していくが、そこに浮かんでくる「わたし」の姿が、日本という国が国家としてのスローガンとして掲げたものとは一線を劃したレベル、すなわち自らの「性根」を探す方途として東亜の建設に関わり、それによって生じた結果を誰にも肩代わりさせずに自分自身で引き受けていく覚悟を定めた一人の「人間」として映じてくる点に注目した。そしてそれを補完するものとして、もう一人の作中人物である「リタ」という女が、「私は私でありたい」という思いに支えられて、「亡霊のように人を操る「国」と彼女の性を諜報活動に利用する「男」たちのすり換えの論理と対峙しながら生を貫いた人間として、どのような造形されているかについての分析も試みた。

第十一章では堀田善衛の「祖国喪失」を論じる。小説の書き手は女性作家ではないが、この作のテーマも一國主義的な発想や観念に揺さぶりをかけてくる点にある。日本敗戦前後の上海で「難しい関係」に陥った一組の日本人男女がそれ故に日本人コミュニティの中に居づらくなってその外にさまよい出ていくのだが、そこで二人が見知っていく宝石商ゲルハルトは自らをマラーネ的存在だと規定するユダヤ人であった。すなわち自分の体の中を流れるのはユダヤ民族の血ではあっても、己の生き方にはどんな範疇も適用できないことをゲルハルトはアナキーな笑いを湛えながら告げる。そんな否定的な彼の自己定義は、「黒い瞳」の曲に力を得てむくむくと民族意識を盛り上がらせていく亡命ロシア人一家の姿とは対照的なものとして作品内で反復され、「国のある思想」とは

いったい何であるのかという問いを発していくのである。

「第IV部 異民族並びに多言語空間との交渉」では、アジア太平洋戦争前後、宗主国日本の支配を受けながらも話劇やロシア・バレエの隆盛などさまざまな可能性を宿していた上海の多文化多言語空間と、日本の文学や日本人の文化とはどのように向き合っていたのかを見ていく。まず第十二章ではこの時期上海に亡命してきたユダヤ人美術家のD・L・ブロッホの活動を概観し、とりわけ〈黄包车〉を題材として彼が制作した一連の木版画を収めた画集の出版に際して、共著者の草野心平が贈り届けたキャプションが持つ意味を考えた。その結果、草野の詩人としての感性が版画作品とマッチして、いわゆる画文交響の効果がそこに生じていることがわかった。だが、その反面において、草野は自ら創作したのではない「東亜民族団結行進曲」の歌詞の一節を版画の解説に用いるなどしており、それによってこの画集における芸術上の感興が損なわれ、代わりに戦争遂行のためのプロパガンダ的側面が浮上してくるという問題が見えてきた。併せて、ブロッホもその中に巻き込んで上海画廊を橋頭堡として展開されていく日本の文化工作の一面、上海ゲットーの設置が亡命ユダヤ人の芸術活動に及ぼした影響などについても考えてみた。

第十三章はここまでの論の流れからすれば一種の〈間奏曲〉たり得ようか。昭和文学という主題系からはやや逸れてしまうが、草野心平との関係と、やがてこの画家がその後ホロコーストを創作のモチーフにしたことを知って興味が増すことになったブロッホの航跡を追いかけたものである。彼や彼の家族の人生にとってゆかりのある上海の提籃橋、ミュンヒェン近郊のダッハウ、浙江省の一地方都市硤石といった場所を実際に訪れた折に得た感興と、それぞれの場所で着想されて成った彼の作品についての鑑賞とを綴りあわせてみた一文である。

第十四章も論の比重は文学よりも文化の方に幾らか傾いている。より正確に言えばライシヤムシアター（蘭心大戲院）を軸にした一九四〇年代はじめの劇場文化についての調査研究が論の半ば以上を占めている。ただし、この劇場に関心を持った当初は現地邦字新聞の「大陸新報」一紙のみを主要な資料として扱わなかったのと比し

て、本稿では同時期の上海で刊行されていた英字新聞、仏語新聞からも同劇場に関する多数の情報を集めた結果を反映させてある。それによってライシヤムが多様な劇場芸術を生み出す場であり得たことが確かめられるとともに、上海という場における日本文学の位相を客観的に捉えていくためにも、この多言語横断的研究の手法を据えていくことが重要であることを問題提起したつもりである。章の後半では、多言語資料を用いて見えてくるライシヤムを光源として、この劇場空間で演じられたものやそこに集う人間たちの姿を作中に取り込んでいった多田裕計、阿部知二、武田泰淳の小説を分析している。

「第V部 現地新聞・雑誌メディアの中を走る力線」では「第IV部」とは対照的に現地発行の日本語新聞および雑誌の言説空間に分け入り、そこに掲載された文学作品を中心として戦時下における日中文化交流や現地文学のあり方にどういった問題が惹起されていたかを探ってみた。第十五章はその前提作業として「大陸新報」を一瞥し、文芸文化の側面からこの新聞の具えている資料的価値を考察したが、そこには草野心平のそれをはじめとする個々の作家の作品年譜からは漏れていた作品や、これまで十分に照明のあてられてこなかった現地文学団体の動向に関する記事が多数掲載されていることが確かめられた。

第十六章でも扱う対象は「大陸新報」で同じだが、とりわけ租界の返還（一九四三年）以降、とみにその量を増してきた中国の文学と文化に関する言説を取り上げ、その書き手が日本人であることは共通しているも、彼らの表明する中国文化の理解の仕方や日中文化交流の方途実践についての考え方は決して一枚岩にはなっておらず、むしろ乱立と対立の様相を呈するものであったことを、島田政雄と池田克己を中心とする上海文学研究会同人との間で取り交わされた民族文学論争をもとにして確かめてみた。そして、その過程で見えてきた政治的言説と「私」性に寄り添う言説との相剋という問題にも関心を向け、後者の傾向を示した作品を載せていったことも、いわゆる国策新聞としての使命を前面に打ち出してきた「大陸新報」が抱え込んでいた一つの矛盾ではないかとの指摘を行った。



第十七・十八章は「大陸新報」より一年後の一九四〇年に創刊された現地総合雑誌「大陸往来」の初期を考察の対象とした。まず十七章では同誌の発行に至るまでの経緯と大陸往来社について知り得た情報を整理するとともに、向後の研究に資するため一九四一年一二月号までの同誌の目次一覧を作成して掲げた。

次いで十八章は初期の「大陸往来」に掲載された現地作家の手になる文学作品の考察にあてた。時あたかも上海青年団の発足に象徴されるように新体制に即応した現地青年運動の動きが加速していたが、それが作者のモチーフに影響して、建設実践に邁進する青年と彼を支える健康美に満ちた女性が小説世界に氾濫してくることがわかった。そして、こうした翼賛的な傾向が、現地作家が室生犀星の作品をどのように受容していたかを見ていても抽出できることについても論じた。その一方で、同誌に掲載された女性を書き手とするいくつかの随筆作品中に、総力報国の掛け声とは一定の距離をとったものが出てくる点にも注目した。

第十九章では前章最後の話題を受けて文学者室伏クララの仕事を考察の対象とした。具体的には日本統治下の南京及び上海の出版メディア界にあつて翻訳家や編集記者などの肩書を持つ彼女の存在が浮上してくる過程を明らかにするとともに、クララの翻訳した作品の中には同時代の政治的状況に回収されていくことを拒む、より普遍的な人間の魂の動きの方に舵を切った小説や随筆も含まれていることを指摘した。そしてそれと同様の傾向が、彼女自身の創作で「大陸新報」に発表された「上海にて」と題する随筆と、日本敗戦一年前に上海で創刊された詩誌「亜細亜」に載った「繁星の下」にもはっきりと見受けられることについて論じた。